

“普通話”と北方語彙

——浩然の作品を中心として——

阿 頼 耶 順 宏

The ‘Putonghua’ (Common Language) and Vocabulary of Northern Chinese with Particular Reference to the Works of Haoran

Junkō ARAYA

1. 官話から普通話へ
2. 基礎方言としての北方語
3. 典型的な現代口語文
4. 浩然の経歴と作品
5. 浩然の作品と北方語

1. 官話から普通話へ

現在、中国では中国全体を代表する言語としての中国語を“漢語”と呼ぶ。総人口の94パーセントを占める、いわゆる漢民族の用いる言語という意味での命名である。漢民族以外の6パーセントに相当する約4000万人は、壮族（広西に住む、780万）、ウイグル族（新疆、390万）、チベット族（チベットなど、280万）、蒙古族（内蒙古など、160万）、苗族（貴州など、270万）などから人口数百の民族までの50余の少数民族で、それぞれ固有の言語をもつ。「漢語」という名称は、こうした少数民族の言語を認めた上での命名である¹⁾。

同じ漢民族の中でも、各地方によってさらにさまざまな方言をもつ。方言の分類については、今世紀の初め章炳麟は9類に分ち、20年代黎錦熙は12系に分ち、1937年王力は5大系にまとめ、同じ頃、李方桂は中央研究院の調査の結果を参考にして8大類を立てた²⁾。

これらの方言的差異は語音・声調・語彙の上にも存在し、別の方言区の人々とのあいだの相互理解をはなはだしく妨げる。

「中国全国の放送局55局のうち、15局是北京語音によって放送している外、なお18種の方言（小方言を含む）による放送番組を持っている。北京語音による放送はかなりの地区において、一部の人によって聴取されているにすぎない。……また広西放送局では、北京語音による放送以外に、柳州官話・広東方言による放送というように三重の放送が行なわれている。」³⁾

同じ物がいろいろの方言区においてちがった名称をもつ一例をあげれば、とうもろこしは<<玉米・棒子・包谷・苞米・珍珠米・六谷・閩粟・粟米……>>と各地ごとにその名称はちがう⁴⁾。

中国の近代化とともに、共通語の必要が痛感され、さまざまな運動が行なわれてきた。ここ

では、官話から普通話への推移を唐宏の要約した文章によって見ることにする。

「北京語は過去には“官話”“国語”と呼ばれたが、新中国が成立してから、北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言とし、典型的な現代口語文の著作を語法の規範とする“普通話”を漢語を共通に理解し、共通に使用する民族共通語と規定した。

清代の封建王朝は北京に都をおいたが、清朝皇帝は満州人であったので、宮廷ではすべて満州語を話した。しかし、清代後期には遂に満州語をやめて、大多数の人が常用している北京語を話すことに改め、後に“官話”を制定し、一時は盛んに行なわれて官界宮廷に普及した。これが“官話”というこの名称の由来である。

民国の初期に至って、北京語を“国語”とした。しかし、各民族の間で白眼視し合い、そのうえ普及を推進する有効な方法がなかったため、“国語”はずっと少数の地方で通用するだけで、各地各民族は依然として自分たちの言語を話していた。

1949年になって、“国語”を“普通話”と改称した。普及簡明、通用という意味からとったものである。これはただ名称を改めただけでなく、少数民族に対する尊重ということも含んでいる。普通話は全国で大いに推進し、普及を望むけれども、少数民族はやはり自己の民族言語を使用する自由を保留することができるのである。⁵⁾」

2. 基礎方言としての北方語

「北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言とし、典型的な現代口語文の著作を語法の規範とする」漢民族の共通語が“普通話”であるが、この決定は1956年の現代漢語規範化問題学術会議で行なわれた。

「北京語音を標準音」とするために、いわゆる北京語で、一字を二つ以上の音で読むもの82字について、一音に統一することも行なわれた。たとえば「法」は fǎ の音のみにして、fá, fà の音をけずり、「学」は xué を残して xiáo をけずり、「亜」は yà を残して yǎ をけずるなどである。北京語の語彙についても、北京語には他の方言と同様、その地方の風俗習慣から生まれた特有の語彙があるが、これらのうち、他の土地の人のびとにわかりにくいものは、普通話としては取らないようにしようとしている。たとえば「胰子」は「肥皂」に、「取灯儿」は「火柴」というふうに。したがって、“普通話”は北京音を標準とするとといっても、“普通話”がすなわち北京語であるというわけではない。

「北方語を基礎方言とする」という理由には、北京が中国の首都で、政治・経済・文化の中心であることや、また歴史的に見て、いわゆる白話文で書かれた『三国演義』『水滸』『紅樓夢』『儒林外史』等は、北京語を根拠としていること、また五四運動以後、文言文と代わった白話文も基本的に北京語に依ったことなどのほかに、いわゆる北方語が他の諸方言に比べて、圧倒的な方言分布をもつことがある。⁷⁾

北方方言（下江官話及び西南官話を含む）

38,700万人

江浙方言（吳方言） 4,600万人

湖南方言（湘方言） 2,600万人

江西方言（贛方言） 1,300万人

客家方言 2,000万人

閩北方言

700万人

こうした実態の上に立って、中国における共通語の問題を考えると、小さな島国で比較的順調に近代化の道を歩んできたわれわれ日本人の場合とは、比較にならぬ困難があることは明白である。しかし、抗日戦争およびそれに続く解放戦争の期間に、中国全土は坩堝のように攪拌され、民族の大移動が行なわれた。革命後も今日に至るまで、各地における建設作業に多数の人びとが動員され、「人民に学べ」というスローガンの下に、かつての知識階級や学生たちは続々と「下乡」して地方の農山村や工場へはいって行った。人民解放軍には多数の各省出身の兵士が起居を共にし、ここでも“普通話”の教育が行なわれている。小学校、中学校の普及もめざましく、今までに見なかった規模での共通語教育が可能となって来ている。これに新聞・放送・映画・演劇の普及という面を考え合わせれば、北方語を基礎とする共通語、“普通話”はますますその範囲を拡大して、方言区に侵入しつつあるということができよう。

3. 典型的な現代口語文

“普通話”が語法の規範とする典型的な現代口語文とはどのようなものをさすのであろうか。

毛沢東は早く1942年2月、延安幹部会における講演「党八股に反対する」で、古い時代の八股文にかわって、党内の一部で党八股の文章が現われていることを述べ、中味のないからっぽなことばを並べた文章、虚勢をはり、わざと人をおどしつける文章、対象を考えないで書かれる文章、ことばに味がなくてひからびている文章、箇条書にするだけの形式的な文章、責任感なしに書きなぐった文章、等について鋭い批判をしているが、その中で次のように述べている。「第一に人民大衆にことばを学ばねばならない。人民の語彙は豊富で生き生きとしていて、実際生活を表現しているものだ。われわれの多くはまだことばをちゃんものにしていない。だからわれわれが文章を書いたり、演説をしたりするときに、生き生きとしてびったりした、力のあることばがなく、ひからびた何本かの筋があるだけで、ルンペン⁸⁾みたいに見苦しく瘦せていて、健康な人のようにみえない。」

今日の中国における文学芸術を指導する基本理論は、この「党八股に反対する」から3カ月後の1942年5月に、毛沢東の行なった「延安の文芸座談会での講話」（「文芸講話」と略称される）であることは、周知の事実である。当時、国民党地区から文学者・芸術家が大量に延安にはやってきたが、彼らの生活習慣や、ものの考え方が中共地区の文化と調和せず、混乱状態が生まれていたことから、数十名の文学者・芸術家を集めてなされたこの座談会での講話で、毛沢東は、あらゆる種類の文学・芸術の源泉は、人民生活の中に存在していて、これは荒けずりのものではあるが、もっとも生き生きした、もっとも豊かな、もっとも基本的なものであると述べ、これこそすべての文学・芸術の、取りつくせず、汲みつくせぬ唯一の源泉である、と力説した。そして、そのために

「学者・芸術家は、かならず大衆の中へはいって行かねばならない。かならず、長期にわたって、無条件で、心を打ちこんで、労働者・農民・兵士たちの中へはいって行き、火のような闘争の中へはいって行き、唯一のもっとも広い、もっとも豊かな源泉の中へはいって行き、すべての人間、すべての階級、すべての大衆、すべての生き生きした生活形式と闘争形式、すべての文学・芸術の原始的な素材を観察し、体験し、研究し、分析しなければならない。そうしたあとではじめて、創作過程にはいることが可能となるのだ。」⁹⁾

このように述べる毛沢東自身の文章そのものが簡潔で味わいがあり、じつにわかりやすい文章で、「典型的な現代口語文」である可能性をもつが、ともあれ、ここに示された文芸路線によって、従来の知識階級出身の作家に変わって、一般大衆の中から、次々と新しい作家が現れてくる。兵士になってから文字を覚えたという高玉宝は別としても、労働者作家の万国儒、胡万春、唐克新や農村出身の趙樹理、兵士出身の林雨、金敬邁等等、まことに百花斉放の趣があったが、やがて文化大革命の進展とともに、当時の文学体制と密着していた多くの作家、評論家は批判を受け、文学史年表には空欄が続くことになる。

こうした激しい流れの中で、文化大革命を経てなおその声価はいよいよ高く、現代中国を代表する作家に浩然がいる。文芸講話路線を忠実に守り、多数の作品を発表し、500万部を出したと言われる長篇小説『艷陽天』や『金光大道』を書いた作家、浩然の作品を材料にして、以下、北方語の問題を考えてみたい。

4. 浩然の経歴と作品

浩然の小説については、別に小論を発表したことがあるので、ここでは詳述を避ける。¹⁰⁾私が浩然の作品に注目したのは、その芸術性・思想性ということよりもむしろ、彼の文章のもつ生き生きとした表現、農民生活の中から生まれた豊かなことばのおもしろさに惹かれたからであった。

「文化・教育、文学・芸術、体育・医療衛生、科学研究は、すべてプロレタリア階級の政治に奉仕し、労働者・農民・兵士に奉仕し、生産労働に結びつかなければならない。」というのは、中華人民共和国憲法第十二条の規定であり、文学は政治に奉仕するものとされている国で、この作家の作品が出版されるのは、その作品のもつ思想性、政治性の故であることは当然であろうが、しかし私は、この作家の作品がこれほど広汎な人民大衆に支持される秘密の一つは、彼が農村に育ち、農民と共に生活し、農民の忠実な代弁者として、暖かく人びとを見つめていることと、農村の中に生き生きと使われていることば、巧みな比喩、くだけた表現を身につけていて、これを作品の中に縦横に駆使している点にあると思う。

浩然は本名を梁金広といい、1932年、河北省薊県に農民の子として生まれた。薊県は、今は天津特別市の北部に位置し、北京の東の郊外ともいえる場所である。幼年時代から家の手助けをして畝で仕事をしたが、家が貧しく、しかも薊県のある冀東一帯は、抗日戦争の時には遊撃戦の根拠地となっていた地区で、小学校には3年間通っただけだという。10歳で両親と死別し、その後は貧しい農民に育てられ、児童団の団長として、解放軍や民兵を助けて、監視、偵察、連絡などの仕事をした。16歳で、中国共産党に入党、1949年冬、地区の党委員会で青年工作の責任者だった時、生産促進キャンペーンのための短い劇を書いたのが、彼の最初の作品で、やがて「河北青年報」という新聞の通信員となる。

1952年には河北省の団校（党青年団学校）にはいって学習し、その後1956年まで農村工作に従事する。1954年から「河北新報」の通信記者をしていた浩然は、北方農村を歩きまわる中で、農民の生活感情に密着した作品を書き始める。1956年8月の〈〈北京文芸〉〉に「喜鵲登枝」が載ったのを初めとして、1957年には「一匹瘦紅馬」〈〈火花〉〉、「新媳妇」〈〈芒種〉〉、「雪紛紛」〈〈長春〉〉、「夏青苗求師」〈〈中国青年〉〉と次々に短編小説を発表し、1958年には最初の作品集『昔鵲登枝』（作家出版社）が出版され、以後、『苹果要熟了』（作家出版社）、『新春曲』（中国青年

出版社),『珍珠』(百花出版社),『蜜月』(北京出版社)とつづき,1963年には『杏花雨』(上海文芸出版社),『彩霞集』(中国青年出版社)が出ている。この間,発表された作品は百数十編にも及ぶという。

1964年以降,浩然是専門作家となる。その前,1962年からまる三年をかけて,河北の一農村での合作社内部の闘争をテーマとした『艷陽天』(人民文学出版社)を書き上げた。総ページ数で1788ページ,百万字を越える創作で,こうした長編の出版は現代中国では異例であり,作家浩然の声価はここに定まった。

1972年には『金光大道』第一部が,1974年には第二部が人民文学出版社から出たほか,短編小説集『楊柳風』(北京人民出版社),『春歌集』(天津人民出版社),児童文学『幼苗集』(北京人民出版社)などが1973年に出版されており,1974年には西沙群島での自衛反撃戦をテーマとした『西沙儿女』の「正気篇」「奇志篇」が北京人民出版社から出版された。彼は現在北京市創作組で他の作家たちと共に,後進の文芸工作者の指導にも当たっているという。

5. 浩然の作品と北方語

浩然の作品の中から,農民たちの会話を生き生きと描いている部分を抜き出してみよう。『艷陽天』の中で,粟畑を鋤いている合作社の人びとが,二,三日前の会合で合作社攻撃をした連中について議論している所である。

“嗨,说一千,道一万,没有地长不出庄稼。没娘们能养孩子吗?你养个我看看!”

「へえ,千べん万べんしゃべくっても,土地なしで作物ができるかよ。よめさんなしで子どもが生めるかね?おめえ,生んでみせてくれや!」

“这样说话,真是肉锅煮元宵——混蛋!”

「なにぬかす,肉鍋で精進料理つくるのか——ほんくら!」

“你看你是黄鼠狼顶草帽,假充好人!”

「おめえはいたちが麦わら帽子かぶったみたいに,ええかっこしとるだけじゃが!」

这一场刚收,另一场又起来了:

こちらがやっとおさまると,今度は別のがまた始まった:

“在会上人,有理也是没理!”

「会議で人をどなったら,理屈があっても通らなくなるわ!」

“不给他来个厉害的,他更不知道马王爷三只眼了!”

「痛いめに会わせてやらんと,あいつはこちとらがにらんでるのがわからんのだ!」

“骂管什么用,把人家骂倒了?”

「どなって何になる,どなって相手がひっくり返るか?」

“反正出了气,白犒了!”

「どうせ,うさばらしよ,むだでもどなるさ!」

“白骂?你瞧着,要是让连福白把人骂犒了,我管你叫好听的!”

「むだでもどなる!やい,もし連福にむだにどならしたというんなら,おれはおめえの言うとおりにしようじゃねえか!」

“撒不出一丈的尿。”

「ほざいても小便は一丈飛ばねえぞ。」

仨一群，俩一伙，另一边也在争论：

三人ひと組，ふたりでひと組と，別のところでも言い合いをしている：

“弯弯绕硬说没吃，我看连哑叭都不能信！”

「まわり道のやつ，食う物が無いと言いはってやがるが，おしだって信じねえぜ！」

“你别撑的难受了，弯弯绕就不兴没吃呀！”

「おめえ，腹がはってつらいのか，まわり道のやつだと食い物が無いといけねえのかよ！」

“他绕，绕出什么来了？”

「やつはまわり道しやがる，まわり道してどうなるちゅうんだ？」

“这年头，反正怎么着也好不了啦！”

「このご時世じゃ，何やらかしたって，よくなりっこねえよ！」

ここで“说一千，道一万”，“肉锅煮元宵”，“马王爷三只眼”，“撒不出一丈的尿”などは，民間の俗語で日常よく使われているものであろう。“黄鼠狼顶草帽，假充好人¹³⁾”はいわゆる歇后語（しゃれことば）で，こうした語は浩然の作品では盛んに現われる。さらに“庄稼”“娘们”“混蛋”“仨”“俩”“不兴”などは，明らかに北方方言である。

こうした北方方言が，次第に普通話の語彙として全国に広がっていることは事実としても，他の方言地区の人びとに，どの程度まで理解されているものであろうか。北方方言をまとめた書物として，信頼しうる大著はまだ見ていない。私が利用しているのは次のようなものである。

任明「北方土語辞典」（上海，春明出版社，1951年）

湖君「北方口語簡釋」（広州，南方通俗出版社，1954年）

陳子實「北平諧後語辞典」（台北，大中国圖書公司，1969年）

唐宏「北京話与漢語拼音」（香港，上海書局，1974年）

これらの書物は，その出版地から見ても，他の方言地区の人びとにわかりにくい北方語を解説したもので，たとえば湖君の書物では編集の目的を「華南地区の読者が北方の文芸作品を読むのを助けるとともに，学校教師の授業の準備の参考にする」ためだと書いている。

書物を読む場合にはそれでいいとしても，耳から聞く場合はどうか。香港の新聞「新晚報」の¹⁴⁾記事で，喬坂は映画「艷陽天」のせりふについて，「地方的な色彩の濃厚なことばを，映画で使うことになると，観衆には聞いてもわからないという問題が起こってくる。だが，もし全部を普通話にして映画のせりふとすると，今度は地方的な色彩や生活の息吹きを失ってしまう。」ために浩然の「艷陽天」のシナリオ作者は，映画のせりふの中で，原著の土語俗語を原意をそこなわない程度に簡潔な普通話に改め，一方，北京の俗語も残して，観衆にもよくわかり，地方的な色彩をも失わないように苦心していることを述べている。しかし，それでもまだ閩・粵（福建・広東）の観衆にはわからないせりふがあると思うからと，北京の土語俗語をあげて解説を加えている。それは次のような語である。

甩手不管（ほったらかして，かまおうとしない） 主心骨（はっきりした考え，よりどころ） 甬猜（疑うな，かんぐるな） 别打岔（話に水をさすな） 心里（考え） 估摸（だ

いたいのところを推量する) 节骨眼儿(重大なポイント, 大事な瀬戸ぎわ) 纳闷儿(腑におちない) 挂连(ぐるになる, 気脈を通じる) 没门儿(見こみがない) 一块儿论透亮了(みんなで徹底的に話し合う) 扛长活儿(地主の作男になる) 乱打一锅粥(めちゃくちゃなことをする) 晌午(昼, 正午)

さらに「新晚报」は喬坂の「『金光大道』中の北方語彙」を15日間にわたって連載し、200以上の北方語に解説を加えているが、このことから、北方方言は語法においては、他の諸方言に比べれば高度の共通性をもっているが、語彙においては、なお方言的差異が相当大きいことがわかる。北方方言を基礎にした文学言語にはまだ多くの選択と加工の余地が残されていると言えるであろう。

・ 北方語彙とその用例

次に浩然の作品の中から、よく使われている北方語を選び出すことにする。

『艷陽天』の初めの部分で、息子の嫁が死んで、じいさんと息子と孫(男)の三人ぐらしであることを“筷子挾骨头”と書いている。

一家人筷子挾骨头——三条光棍, 没个娘们, 日子怎么过呀! (第1章1) (以下特に注しないものは『艷陽天』からの用例)

(一軒の家が、箸で骨をはさんだみたいにな三人、女手なしでどうして暮らしているのだ!)

ここの“光棍”(一作「光桿」。单身汉。有时亦称流氓, 地痞为光棍。——『北方口語簡訳』)や“娘们”(娘儿们。妇女。有时含轻视之意——『同』)も、北方語である。

筷子挾骨头, 三条光棍儿。不象个过日子的人家呀! (第52章673)

(箸で骨をはさんだみたいな三人のチョンガーよ。まともな暮らしの家じゃないよ!)

のように、ほかにも出てくる。

農民の間でよく使われる俗語も多い。

咱们过日子不是光求三个饱一个倒就行了。(第4章41)

(わしらの暮らしは、三度の飯を腹いっぱい食って一度眠りゃそれでよいということだけじゃなくなった。)

の“三个饱一个倒”という味のあるいい方や、这, 这, 这不是骑着人家脖子拉屎吗?(第5章61)

(こ, こ, これじゃ、人の首にまたがって糞たれるのと同じじゃねえか?)

の“骑着脖子拉屎”(北方成语。形容欺人太甚之用语。——『北方土語辞典』)や、

哼, 那时候呀, 你小子连个狗屁都不如啦。(第6章68)

(フン、そのときは、お前さんなんか、犬の尻より値打ちがなくなるんだよ。)

の“连个狗屁都不如”という、やや下品な言いまわしも、いかにも農民らしい。あとの文の“小子”(北方土語。①对儿子的称呼。②对年青人的亲热称呼。③对人的侮辱称呼。——『北方土語辞典』)も、盛んに出てくる語である。

以前は方言であったものが、解放後広く用いられるようになった語も多い。“啥”“搞”“垮”などが代表的なものである。普通話の語彙約6万語を収録した『漢語拼音詞匯』(1963年文字改革出版社)の中では、地域方言と見られているものには〔方〕と注しているが、“啥”“搞”“垮”には〔方〕の注がなされていない。普通話への定着を示すものであり、今後も選択淘汰されて生き残った方言が、普通話の語彙を豊富にしていくなことになるのであろう。

我们回去不回去倒没啥。(第1章11)

(わしらが帰るかどうかは大したことじゃない。)

你看，你看，这是啥呀？(「幼芽」『楊柳風』96)(ホラ，ホラ，これなに?)

今年生产又搞得特别出色，……(第1章2)

(今年のできは特別にずばぬけている，……)

“搞”は以前は西南方言であったものである。这下子東山垮垮了，……(第2章16)

(これで東山塙はおだぶつよ，……)

“垮”はこわれる，つぶれる，だめになる意の俗語で，“垮台”とも使う。

农业社垮了台，马之悦还可以混水摸鱼，还可以稳坐江山。(第6章80)

(合作社がつぶれたら，馬之悦はどさくさまぎれに，まだ天下をのっとれる。)

これに類するものをいくつかあげてみると，“挺”(很，十分。——『北方口語簡訳』)

見不到，喊不应，老头子挺着急。(第1章5)(姿も見えず，呼んでも答えず，じいさんはひどくいらいらした。)

小个儿，驼背，挺机灵。(「鉄面無私」『楊柳風』35)(小がらで，ねこ背だが，ひどく頭がはたらく。)

“棒”(好，高明，强壮。——『北方口語簡訳』)

那个小媳妇可棒啦，……(第3章33)(あの若い嫁さんは本当にすごいわよ，……)

棒劳力都到水库去了，(「箭杆河辺」『春歌集』105)(すごい力のあるのはみなダムへ行ってしまった，……)

你们妇女真叫棒呵！(同，123)(あんたたち女の人とはまったくすごいなあ！)

妇女有什么棒的！(同)(女がすごいことなんかあるもんですか！)

これは“棒棒的”というふうにも使われる。(棒棒的即美好的，兴旺的，好好的——喬坂「新晩報」)

这样我们才能团结一致，把咱们芳草地的的工作搞得棒棒的。(『金光大道』第2部471)(こうしてこそわしらは一致団結してあの芳草地の仕事をりっぱにやることができる。)

“捎”(山西，西北土語。託人帶東西——『北方土語辭典』)

这是马主任让我捎給您的。(第1章7)

(これは馬主任からわしがあんたにことづかったものです。)

把县委书记捎来的话在心里重复一遍。(『金光大道』第2部6)(県委員会書記のことづけてきたことばを，心の中でもう一度くり返した。)

“吭”(陝西，山西土語，发声之意。如：吭声。吭气。——『北方土語辭典』)

于是，就想逗逗这个急性子人，一气不吭，……(第5章51)(そこでこのせっかちな人をちょっとからかってやろうと，一ことも口をきかずに，……)

孙桂英没吭声。(第50章652)(孫桂英はおしだまっていた。)

他见我可不吭声，自己回答说……(「幼芽」『楊柳風』99)(彼は私を見てもしゃべろうとせず自分で答えて言った，……)

一直没吭声的周永振猛地站起来，喊一声……(『金光大道』第2部418)(ずーっと黙っていた周永振はいきなり立ち上がって，どなった……)

他一句也不吭。(第5章54)(彼は一ことも言わない。)

“顶”（北方土語。①算。②反驳。③拼。④拒绝。⑤相待不下。⑥抗住。⑦吵架。⑧至。到。⑨意同「最」。——『北方土語辞典』）

别看人家比你年纪轻，论心术，你仨一块儿也不顶个。（第5章52）（あの人はお前よりは年は若いけれど、やりくちは、お前みたいなのが三人よったってかなわないよ。）

ここの“仨”は“三个”の意味の北京語。

この“顶”からさらに北方土語の“顶小”（至少。最少。）、“顶多”（至多。最多。）、“顶事”（有効。管用。）、“顶嘴”（吵架）や、山西、陝西土語の“顶撞”（打撃）も出てくる。

馬主任说话顶事儿，他要扭着劲儿，可就难办了。（第5章54）（馬主任のことはききめがある。あの人があそこを曲げると、こいつはやりにくくなるよ。）

要那样，顶多批评你几句，……（第6章67）（そうしても、せいぜい二言三言批判されるだけだ。）

顶多能校长，顶什么用！（第7章83）（せいぜい校長になるのが関の山、なんの役に立つんだ！）

“美”（山西、陝北、西北土語。①很好。②形容舒适之状。又陝北常用的这句话「美的太」即极美，极好。——『北方土語辞典』）

猴丫头，又碰上什么喜帖子了，瞧把你美的！（第16章209）（おてんば娘が、お祝いに呼ばれたんじゃあるまいし、あまりうれしそうにしないさんな！）

「美的你呢」は罵語で「そんなに得意になるな！」の意である。

“甬”（河北土語。读如「绷」。作「不」解。——『北方土語辞典』）

你不回来呀，甬想安排好，乱子也少不了。（第3章27）（あんたが帰ってこなくちゃ、ちゃんと配置ができないどころか、ごたごたもひどく多いのよ。）

“噢”（河北土語。語尾。用法如「啊」。——『北方土語辞典』）

好消息噢！（第1章10）（いいしらせじゃろ！）

その他の俗語もいちいち拾いきれないほど使われている。

“上头”（『艷陽天』原注：童养媳正式结婚的时候，俗称上头。）

那年秋后，萧老大硬强着給儿媳妇上了头。（第1章3）（その年のとり入れのあとで、蕭じいさんはむりやりに嫁を息子と一緒にした。）

“老八板”は、古くさいしきたりのこと。

还是那股老八板的样子不行呀！（第3章30）（まだそんな古くさいしきたりのままじゃ、なっていないわ！）

“乖乖地”は、おとなしく、ということ。

马立本乖乖地跟着胖女人，……（第7章94）（馬立本はおとなしく、でぶのかみさんのあとについて、……）

“抓空子”は、ひまをみつけること。

你也抓空子劝劝他。（第8章109）（あんたも、ひまをみてはあいつに勧めてみてください。）

“完蛋”は、だめになる。失敗する。おわる。

农业社呀，统购统销呀，全完蛋。（第9章114）（合作社だろうが、共同購入共同販売だろうがすっかりだめになる。）

“颜色”は、一般には「色」のことだが、俗な使い方では、味なところ、ばかにならぬところの意。

想着耍耍赖，給农业社一点颜色看。(第10章128) (なんとかかんとか文句をつけて、合作社に、ばかにできぬところを少し見せてやろうと思っている。)

“说话”は、一般には「話をする」だが、北京の俗な使い方では、すぐに、そうこうしているうちに、の意。

说话可就要动镰刀了。(第10章132) (もうすぐに鎌を下ろさなきゃならん。)

“两下子”は、かなりの腕前ということ。

这家伙真有两下子。(第15章199) (あいつはまったくいい腕をもっておる。)

“乍”は、……したばかり、……しはじめ、またはたちまち、ふいにの意(東北、河北土語。开始。初起——『北方土語辞典』)

乍一看，挺吓人，实际碰碰，什么都没有。(第13章175) (ちょっと見ると、ひどく恐ろしそうでも、実際にぶつかると、なんということもない。)

“咋”は、河南、山東の土語で、普通話の“为什么”“怎么”にあたる。

我说长春，你看咋好，……？(第5章54) (長春よ、お前どうしたらよいと思う、…？)

“熊”は、おずおずとした、いくじのない、という意をもつ東北、北方土語である。

你就当那个熊队长吧。(第11章150) (お前さんはそのへっぽこ隊長でもやっていな) これは“熊样”“熊样子”とも用いられる。(北方土語。狼狽の様子。可憐の様子。——『北方土語辞典』)

見韩道满这种畏畏縮縮的熊样子，又生气。(第20章267) (韓道満のこんなおどおどした、いくじのないさまを見ると、また腹を立てた。)

“扛活”は農家に傭われて働くこと。(当傭工。)

那会儿你正给马小辫扛活呀！(第14章185) (その時お前はちょうど馬の弁髪野郎の所で働いてたよ！)

これは“扛小活”(地主や富農の臨時雇いになること。また少年で雇われて仕事をする者をいう。北方土語。农村里的童工。——『北方土語辞典』)とか、“扛大活”(重労働に傭われること。またおとなの常傭い。山東、東北土語。作成人劳动。傭农。——『同』)としても用いられる。

……他从小给地主扛小活，……(「彩霞」『春歌集』339) (彼は小さい時から地主に雇われて仕事をした……)

我爸爸象我这么大的时候，给地主扛小活，……(「幼芽」『楊柳風』102)

(ぼくのとうちゃんはぼくぐらいの時に、地主に雇われて働いた、……)

“串门”(串门子：陝北，晋，西北土語。①遊逛。②找女人。③白相。)

他要趁人们还没睡下的时候，串串门，谈谈心，摸摸情况。(第3章26) (彼は人びとが眠りつかない前に、家を回って腹をわって話をし、様子をさぐろうとした。)

“节骨眼”(北方土語。原意为身体上的关节处。(转)为事情进行上的关节处。关键。)

工程正在节骨眼的时刻，怎么也脱不开身。(第3章27) (工事はちょうど大事な時で、どうしても抜けられない。)

“出洋相”(北方土語。出醜。耍滑稽。闹笑话。)

光想出洋相，这些人的脑袋瓜是怎么长的呀！（第3章28）（ばかなまねばかりしようとして、この人たちの頭はどうなってるの？）

“邪门”（河北土語。奇怪。古怪）

马之悦放弃生产自救，走邪门歪道。（第2章14）（馬之悦は生産自救を放棄して、よこしまな道を歩む。）

“兴许”（普通話の也许，或许，准许の意）

要说，群众困难了，兴许顾不过来。（第12章160）（もしもみんなが苦しいというなら，面倒みきれないこともあるかもしれない。）

“吹台”（事不成叫吹。如：吹台，告吹，吹了。）

吹台，这个受气包的队长不当了。（第11章152）（やめた，こんなどなられてばかりの隊長なんぞまっぴらごめんだ。）

“老实巴脚”（河北土語。很老实。）

为人平和，一向老实巴脚的。（第12章155）（人がらがおだやかで，まじめ一方だ。）

“利索”（北方土語。灵活。简捷；整齐。干净。）

到了，不把事情干利索不走。（第21章278）（来たら用事をすっかり済ますまでは帰らない。）

“纳闷”（心中怀疑。）

萧长春心里挺纳闷，这是谁家的妇女，……？（第3章26）（蕭長春はふしぎでならなかった，これはどこの家の女だろう……？）

“猫腰”“哈腰”（弯腰，俯下身子。）

地南边那人并没有蹲着，是猫着腰哪。（第11章139）（畑の南の人は，しゃがんでいるのではない，腰を曲げているのだった。）

还跟你点头哈腰，这都是为什么？（第19章260）（そのうえお前さんに頭を下げ腰を曲げてあいさつをする，これは一体どういうことだ？）

そのほか，浩然の作品で注意すべきことは諺の類——屋漏又遭连夜雨（泣き面に蜂），三天打魚两天晒网（三日坊主），躲了和尚还躲了寺（坊主憎けりゃ袈裟まで憎い），脚踩两只船（二足のわらじをはく），哭天抹淚（泣きの涙），木已成舟（あとの祭）——や，成語の類——指桑说槐（あてこすりをいう），见好就收（ぼろの出ぬうちに手をひく），心直口快（思ったままを口に出す），白手起家（裸一貫で身を立てる），以牙还牙（歯には歯を），順水推舟（調子を合わせる），劳而无功（むだ骨折り）——や，さらに前述した歇后語の類が，どのページにもと言っていいほどに盛んにあらわれる。これは作者の才能であると同時に，民衆のもつことばの豊富さを証明するものであり，普通話が汲めども尽きぬことばの源泉をもつことを示唆するものである。普通話の語彙を考えると，浩然の作品はその重要な資料の一つとなるものであると思う。

(1975, 9, 10.)

〔注〕

- 1) “漢語”を一般的には“中国話”“中文”と呼ぶこともある。
- 2) 「中国語の方言」Willem A. Grootaers・小川環樹（『中国語学事典』1958年，江南書院）
- 3) 「民族共通語の問題」伊地智善雄・大原信一（同上書）
- 4) 同上。

“普通話”と北方語彙

- 5) 唐宏『北京話と漢語拼音』(2)推廣普通話(香港, 上海書局, 1974年)
- 6) 普通話審音委員會第三次審定(1964年)による。
- 7) 「民族共通語の問題」(前掲書)
- 8) 「反对党八股」1942年2月8日(『毛沢東選集』第三卷, 1969年, 人民出版社版)
- 9) 「在延安文艺座谈会上的讲话」1942年5月(同上書)
- 10) 「浩然の小説」(『入矢教授・小川教授退休記念論文集』1974年, 筑摩書房)
- 11) 浩然「仕合せな生活と執筆」(『人民中国』1972年5月号)
楊青「浩然的経歴和創作」(香港, 『新晚報』1974年5月2日～5日連載)
古勝正義「浩然」(『中国語』74, 8)
- 12) 服部隆造・鐘ヶ江信光「中国歇后語の研究」(風間書房, 1975年)や陳子實「北平諧後語辞典」(大中国図書公司, 1969年)を見てもこれは収められていない。浩然の作品中に見えるもので、これらの書物にないものが多いことは、歇后語そのものの多さを示すものであろう。
- 13) 浩然『艷陽天』第一巻596ページ
- 14) 喬坂「『艷陽天』的対白」(香港, 『新晚報』1974年4月20日)
- 15) 喬坂「『金光大道』中的北方語彙」(香港, 『新晚報』1974年7月29日～8月17日)

“普通话”与 北方語彙

北京话在过去被称为“官话”，至民国初期，就把北京话定为“国语”。自一九四九年新中国成立以后，“国语”改称为“普通话”，规定以北京音为标准音，以北方话为基础方言，以典范的现代白话文著作为语法规范。推广“普通话”是最紧要的事。可是“普通话”的普遍推行还有种种困难。中国有很多的地方方言，所以不是生长在北方的人，对北方性的语言，当然觉得有许多莫名其妙的地方。

现在，『艷陽天』的作者浩然是最著名最有代表性的作家。从他的笔锋中可以嗅到浓郁的乡土味，他用活生生的北方农民的生活语言，表现朴实的人们建设新中国的伟大行动。著作中有许多地方性的土话，俗语。对这些语彙，别的地方的读者可能陌生难懂。我把他作品中，这种语彙搜集起来了。我想，将来，“普通话”与地方方言的互相交流下，需要使“普通话”做为更生动，更有代表性，更丰富，更有表现力的共通语言。